

ずいそう

## 出版ということ

大川 聰



定年後になって私は2冊の本を出版した。『写真でたどる建設機械 200年』と潤滑の専門書である。15年前から現在まで続いている出版不況の中、この2冊の本は本屋さんが嫌う売れないタイトルの代表である。しかし、最初の写真集は大手の本屋さんに好まれ、発刊時は人気のある本のように店頭で平積み陳列されたこともある。日本で初めての建機写真集としては上出来の滑り出しである。最近ではTVクイズ番組のネタ本としても使われており、使用許可や問合せも度々ある。出版社からは「ベストセラーではないがロングセラーです」と言われているが、これは売れない本への褒め（あるいは慰め）言葉らしい。

当初出版社は「面白い写真集になりそうだけど誰が買うの？」と読者層を想定できず、なかなか出版に同意しなかった。そこで、コマツ本社に無理をお願いして多数の購入の約束をもらい、これを以て当日本建設機械施工協会浅野技術部長（当時）をお願いした処、出版を快諾してもらったのが突破口となった。

次の難関は350葉に及ぶ写真の著作権であった。著作権法では工業製品の写真は著作物には当たらない筈であるが、一方では工業製品カタログの写真でも著作権ありとする判例がある。このため全ての写真の掲載許可をもらうことになり、国内外150ヶ所以上と交渉することになった。半年間はメールとファックスのやり取りでパソコンに釘付けの毎日が続いた。国内外の建機メーカーやマニアの人達は掲載許可をくれるだけでなく、より迫力ある写真を送ってくれたりとその親切に感謝することも多かった。一方、海外博物館の中には私が撮影した展示建機の写真に高額の使用料を請求してくる所があった。博物館の言い分は歴史的な展示物の維持負担を考慮して寄付して欲しいとのことであったが、この費用は全て私の個人負担となる。そこで、館長宛に直接手紙を送りこの写真集は教育書であり儲ける目的ではないと説明して半額以下に値引いてもらった。この交渉は半年間も掛かった。また、海外の出版社ではあちこちの部署をたらい回しにされた挙げ句に、40年前にこの写真を撮ったカメラマンを自分で探して交渉しなさいと言われたこともある。

このような写真集ではマニア向けに独特の文体を使

う。例えば「した。」や「であった。」など過去形の文章が多いと読者が本を途中で閉じてしまう。そこで「何々している。」と現在完了形で言い換えると、本の内容が新鮮に思えて写真集を買ってくれるらしい。英語の技術論文でも現在完了形を使って最新の論文であることを印象づけるが、これと同じ文体を使うのは発見であった。

潤滑の専門書出版の提案もやはり出版社数社から次々と断られていた。たまたま大学の先生から私に問合せの電話があったのを幸いに出版の相談をお願いした。先生は学会からであれば出版は可能でしょうとの返事で、学会の出版委員長にお会いすると奇遇にも昔学会研究会で一緒に活動していた人で、意気投合して出版を承諾してもらった。当初建機の潤滑に関する本を単独で執筆するつもりでいたが、学会からは出版不況なので読者層を上げるよう指示された。このため当協会技術委員会で懇意になった農機やバス・トラックメーカーさらに石油メーカーの人達に相談して執筆者を募ることにした。昔からの人脈が大いに役立つ経験であった。最終的に25名近くで原稿を書くことになり、私は編集委員長として文章、図表だけでなく統一感のある内容とすることが課題となった。

似通った業界であるが夫々独特の業界用語や表現があり、先ずこれを共通語に翻訳する辞書を作ることになった。例えば農機に関する原稿に「等高線に沿って車両を動かす作業」と書いてあったが意味が分からない。執筆者に説明を聞いて書き直した文章は「車両が横に傾いたまま連続で耕す作業」である。また、ある時には図表だけを送ってきて文書は適当にお願いしますと言う人も出る始末で、異なる分野の技術表現も勉強する必要があった。

しばしば人に出版で印税が入って儲かったでしょうと言われる。マニア向け写真集の場合には初版は印税無しで第二版から印税がもらえる仕組みである。しかし、この手の写真集は初版で絶版になるのが一般的とのことである。学会の専門書は著作権を学会に移譲するので出版不況の昨今はわずかな執筆料しかもらえない。著名人ならいざ知らず、出版はボランティアと考えた方が良さそうである。

—おおかわ さとし (元) コマツ, (元) 機械部会油脂技術委員長—